

# 地球と遊べる「まち」なんだ みのかも ～RIVER PORT PARK Minokamo かわまちづくり～



かす み たく や  
春見 拓也\*

## 1. 新しい「みのかもスタイル」

木曾川のほとりにあるリバーポートパーク美濃加茂。川からの風や樹木の香を感じる場所、風や川の流れる音が耳に心地よく、川沿いにあるベンチに腰掛けると雄大な木曾川の流れを眺めることができる場所、家族や仲間たちとのBBQを楽しんだり、芝生広場でゆっくりと流れる時間を楽しむ場所。ここは新しい「みのかもスタイル」を体感できる公園である。

## 2. 「まち」で自然に触れ合える公園

ここ、リバーポートパーク美濃加茂は、岐阜県南部に位置し交通の要衝でもある美濃加茂市の南端を東西に流れる木曾川河畔にあり、名古屋から約1時間の場所に位置している都市公園である。

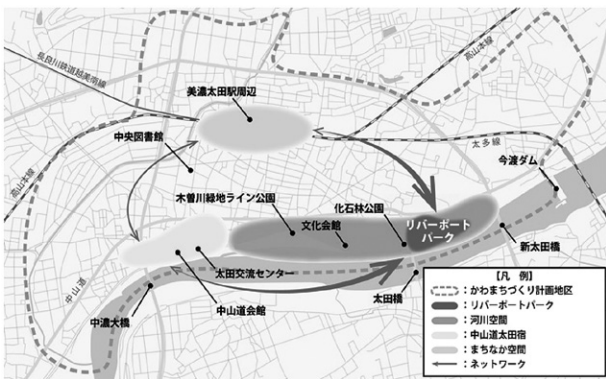


図-1 かわまちづくり計画範囲及び位置図

### 1) 美濃加茂市のかわまちづくり

美濃加茂市は、木曾川沿線を「にぎわい創出の核」として位置づけ中山道の宿場町に多くの来訪者が訪れてもらえるよう、木曾川をはじめとする地域の自然と歴史・文化を活かした「にぎわいのあるまちづ

くり」を目指している「まち」である。

### (1) 背景

この地域はかつて「太田の渡し」と呼ばれる川の渡し場があった中山道の要所であった。江戸時代には文化や産業の交流の場となった中山道太田宿など多様な自然や歴史資源が点在しており、木曾川がもたらす豊かな自然や景観と中山道太田宿の歴史資産が、これからのまちの発展に活かすことのできる貴重な資源である。

### (2) めざすところ

平成22年度に国土交通省のかわまちづくり支援制度に登録し、翌年度には「美濃加茂市かわまちづくり基本計画」を策定した。基本計画では美濃太田駅と中山道会館、リバーポートパーク美濃加茂を賑わいの拠点として位置づけており、拠点間の回遊性を向上させ、賑わいの相乗効果を促し、まち全体の活性化を図ることを共通の目的としている。

### (3) 地域資源の気づき

木曾川と共に生活してきた地域住民にとっては当たり前にある「木曾川」や「中山道」が貴重な資源であることを、そこに住んでいる住民に改めて知ってもらうことが大切であり、外の人との話し合い等で気づいてもらうことが大事な第一歩となった。

### 2) 非日常を体感できる場所としての整備

公園整備にあたっては、外の人からのアプローチで地域資源の「気づき」を実感した地域住民や、利用者などから使い方や楽しみ方の提案をもらい、そのために必要なものは何であるかを一緒に考えなが



写真-1 上空からのリバーポートパーク美濃加茂

ら事業を推進していったことが特徴的である。

例えば、整備前の土地を活用し、共に様々な試験的社会実験を行った。社会実験として行った様々なイベントのデータは公園整備に大きく反映されている。

これまで、当市では都市公園でイベントを行うことはイレギュラーな利用であるとの認識が強く、それは行政だけでなく地域住民の中でもそういった考えが定着していたが、この社会実験を実施していくことによって徐々に取り払われていき、この場所で様々なイベントが開催されるようになり「いつも何かやっている公園」といったイメージが広がっていったのである。

### (1) 公園を使ってもらう人の視点

イベントを実施していく中で、現場の声を直接聞き、行政も一緒に感じることで本当に必要なもの、不要なものを選別し使う人のことを考えた「質の高い空間の整備」ができたと感じている。そして、そういった「使ってもらう人の視点で考える」ことは今も進化しつつあることが、質の高いプレーヤーを呼んでいると考えられる。

### (2) 地域住民たちの意見+デザイン

地域住民たちからの意見のまとめ方として意識したのは、個人が持っているイメージをできる限り共有することであった。より多くのコミュニケーションをとることでイメージの共有だけでなく信頼関係も生まれるものであり、この信頼関係が後々の連携事業に繋がっていった。

また、様々なジャンルの方々からデザイン性の高い施設に関する情報収集を行い共有したイメー

ジに掛け合わせ、この場所に合った具体的なイメージにした。このようにして作り上げたデザインベースは、地域住民らの意見を取り入れるプロセスに丁寧に積み上げ、共有ができていたため今日までの連携を生み、にぎわいの創出もできているのである。

### (3) 関係人口による継続性

園内計画では、指定管理者との調整を行い、より活用・運営しやすいようにデザイン性も重視し整備内容に反映したことや、完成後の現在も施設の利用者や今後利用が想定される方を対象に、現状の施設に対する課題の把握や将来的な利活用に関する意見・要望を把握していくことを意識的に心掛けている。それが継続的な「関係人口」の増加につながっていると考えられる。



写真-2 BBQエリア入り口ドライガーデン

## 3. 創造性に富んだ事業運営

リバーポートパーク美濃加茂では、指定管理者制度により公園の管理・運営を行っているが、この指定管理についても少し工夫を凝らしている。

それは指定管理者の募集にあたり都市公園の設置管理許可を抱き合わせて行ったことである。指定管理者は協定と同時に設置管理許可も得てもらい、こちらの求めていた自主事業運営を行うというものである。運営シミュレーションや実証実験のデータから、切り詰めた指定管理料を算定し、自主事業が大事な儲けどころとなるように設定、その代わりに民間事業者のノウハウを引き出しやすい自由度の高い運営ができる仕組みづくりを行った。実際、この施設は指定管理者によって、デザイン性の高い膜屋根

からなるテントを設けたBBQ施設やアウトドアアクティビティ、そしてカフェの自主事業を運営しており、民間事業者の工夫を凝らした質の高いサービス提供を行っている。また、季節に合わせた装飾や森のイルミネーションをはじめ、指定管理者と地域団体の企画による、公園や施設に隣接するフォレストエリアでのイベントを開催しており、こういった活動が、かわまちづくりの目的となっている「リバーポートパーク美濃加茂が起点となった周辺への回遊性」を向上させている。



写真-3 アウトドアアクティビティ

#### 4. 「かわ」と「まち」をつなぐ

国土交通省により整備された「中山道船着場」や「水際遊歩道（低水路護岸）」の活用により、木曽川の自然を活かした拠点を結ぶ新たなネットワークが可能となったことも、賑わいを「まちなか」に広げる仕掛けづくりにつながっている。リバーポートパーク美濃加茂のビジターハウスにはレンタサイクルが設置されたと共に、コミュニティバスも運行開始され「かわ」や「まち」の拠点を接続する新しいモビリティとしても機能している。

「かわ」と「まち」がつながることで、中山道にも多くの人が集う賑わいの空間や、宿場町の雰囲気を楽しみながら憩うことができる空間として利用されるため、中山道会館が中心となったイベント開催や、空き家を活用した起業などが少しずつ広がりはじめたことで、中山道沿いには人々が寛ぐことができるスペースも新たに設けられている。そのスペースには地域の間伐材を活用した「船」の形をしたベンチがあり、かつての「太田の渡し」の時代に思いを

はせることができる空間となっている。

ここにも「かわ」と「まち」がつながっている場所が存在している。



写真-4 木曽川河畔の遊歩道

#### 5. 人と人とのつながり

美濃加茂市の今までにない新たな拠点として、ここ、リバーポートパーク美濃加茂は整備された。公園内外には、既存林や芝生広場、木曽川といったアクティビティが可能な資源があり、美濃加茂市を代表する公園としてのポテンシャルが無限にあると感じている。それをいかに最大限活用していくか教えてくれたのが、この公園整備に関わってきた人たちである。今もまだ自ら既存林を開拓整備しているボランティアの「森の開拓者」、そして様々なイベントの可能性を見つけ出してくれる「地域のプレイヤー」、この地域資源を活かして川遊びやBBQなどの川の楽しさ、川のリスクマネジメントなどの川の危機管理、いろいろな視点から「かわ」のポテンシャルを最大限活かし、自然の中に暮らしのある生活、新しい「みのかもスタイル」を発信してくれる「指定管理者」、そして、この公園を訪れる「利用者の人たち」、この人と人とのつながりからリバーポートパーク美濃加茂は誕生した。

「人と人、人と自然が交わる、多世代・多文化交流拠点」として、木曽川を中心とした地域の自然に触れ合うことができる公園、地域の人にとって心の拠り所であり続ける公園となるよう、自然との懸け橋となる公園を目指している。

ここは『地球と遊べる「まち」なんだ みのかも』なのである。